

はなに、かきたるぞなど、心にくきほどには、やう花にてふのいみじうおかしきが、とをばかり
ゐたるなりけり、略○中 歌は内の御めのと宰相の内侍のすけかきたり、右には兼房の右衛門佐、蝶
ゐたるとこなつのえだをおりて、すけみち講師○右にとらす、

〔源氏物語二十四胡蝶〕鶯のうらゝかなるねに、鳥のがくはなやかにきゝわたされて、いけの水鳥も、そ

こはかとなくさえづりわたるに、きうになりはつるほど、あかすおもしろし、てふはましては、か
なきさまにとびたちて、やまぶきのませのもとに、さきこぼれたる花のかげにまひいづる、

〔赤染衛門集〕草のなかにてふのしにたるをみて

うき世にはながらへじとぞおもへどもしぬてふばかりかなしきはなし

〔夫木和歌抄二十七〕正治二年百首

とこなつのあたりは風ものどかにて散かふものはてふのいろく

〔源仲正家集〕

はかなくもまねく尾花にたはむれて暮行秋をしらぬてふ哉

〔新撰字鏡虫〕蟻同上義、音宜奇反、

〔倭名類聚抄十九〕大蟻附爾雅集注云、蚍蜉昆浮一名馬蟻宜倚反、今案即蟻字也、見玉篇、和名於保阿里、大蟻也、野王按、

蚍蜉遲鉛二音、蟻子也、

〔箋注倭名類聚抄八〕今本玉篇虫部云、蟻宜倚切、蟻同上、與此注所引合、別名蛾、樂記蛾子時術之、

鄭注、蛾蚍蜉也、是也、又蠶蠶字从虫、俗省作蛾、與此蛾字混、故蛾羅字俗作蟻、以避蠶蛾字也、然則蟻

是蟻一名、非即蟻字、顧氏以蟻爲蟻、或字、恐不然、略○中 今俗呼山安利、爾雅云、蚍蜉、大蟻、郭注云、俗呼

爲馬蚍蜉、毛詩東山正義引舍人云、蚍蜉即大蟻也、說文、蠶蠶大蟻也、蚍蜉字云、蠶、或从虫比聲、又云、

蟻蚍蜉也、略○中 今本玉篇虫部云、蚍蜉、蟻卵也、按說文、蚍蜉、蟻子也、說文又引劉歆說、蚍蜉、蚍蜉子、與此所引